



## 問 題

安政の大獄において処刑された重要人物に、橋本左内（1834～59）がいる。橋本は、福井の生まれで、12歳のときに藩の儒者吉田東篁について学び、16歳で大阪の適塾に入り3年間蘭学と西洋医学を学び、それ以後も西洋の歴史、地理、政治、経済、化学、兵学などを広く修得した。そして、藩主松平慶永に抜擢され、その命により、外交問題（開国か攘夷か）、将軍後嗣問題（一橋慶喜か紀州の慶福（後の家茂）か）、政治の大改革について独自の雄大な国難打開策を引っ提げて、朝廷、幕府、諸藩の間を奔走した。その奔走は、24歳の秋から25歳の秋までの1年間で、徳川幕府の大老井伊直弼の処断により断ち切られた。

この橋本が15歳のときに自らの志を励ますために著したのが『啓発録』であり、別紙はその中の「学に勉む（勉学）」という一節の現代語訳の抜粋である。これを読んで、次のAからDまでの間について、解答用紙の対応するAからDまでの欄に、それぞれ350字以上500字以内で解答しなさい。

- A 段落〔1〕で述べられた「学」についての橋本の考え方に即して、法科大学院における「学」の在り方について論じなさい。
- B 段落〔2〕で述べられた「勉」についての橋本の考え方（下線部）は、一般的には広く共感を得るものであろうが、問題が生じる場合もある。それは、どのような場合であろうか。具体的な社会的事象を一つ挙げて論じなさい。
- C 橋本の「勉」「学」観を踏まえて、あなたが今日まで実践した「勉学」について、具体例を挙げて説明しなさい。
- D 段落〔3〕の内容に留意しつつ、「交わるべき友人」について論じなさい。

### [解答作成上の注意]

AからDまでの間は、それぞれ独立のものとし、独立に採点します。そのため、他の解答欄で書いたことでも、必要な場合には繰り返して書いてください。なお、各問は、解答者の思想・信条を問うものではありません。



(別紙)

学に勉む

[1] 学とはならうということ、すぐれた人物の立派な行いを習い、みずからもそれを実行していくことをいう。従って、先人の忠義や孝行の立派な行いを習っては、直ちにそれを慕いまねし、自分もそうした人々の忠義孝行に、決して負け劣るものかと努力することが、学ということの第一の意義である。ところが、後の時代になって文字の意味を誤解し、学とは詩や文を作ったり本を読むことであると思っているが、これは間違いである。作詩・作文や読書は、学問の添物のようなもので、刀とその外装の柄や鞘、2階とそこへ登る階段のような関係にある。従って作詩・作文や読書を学問と思うのは、ちょうど柄・鞘を刀と考え、はしご段を2階と思うのと同じで、まことに浅はかで雑な考え方といわねばならない。

(中略)

[2] 次に、勉、つとめるというのは、自己の力を出し尽し、目的を達するまではどこまでも続けるという意味合いを含んだ文字である。何事によらず、長い間強い意志を保ち続け、努力を重ね続けるのでなければ、目的を達成することはできないが、まして学問は、物事の道理と筋道を解釈し明らかにするものであるから、(中略) 軽々しく粗雑なやり方では、いつまでたっても真の道義は理解できず、世の中の実際に役立つ学問とはなり得ないものである。

[3] その上また、世間には愚かな俗物が多く、そうした者が学問を始めると、それを鼻にかけたい心が起って上調子になり、出世や富に心を奪われたり、自分の才能や聡明さを人に誇りたい病気が、時々出てくるものである。これらは、みずから用心し慎むべきであることは言うまでもないが、良い友人からそのつど戒めてもらうのが、極めて効果の大きいものであるから、何といても交わるべき友人を選び、わが仁を行うことの助けとし、わが徳を補うよう、心掛けることが必要である。

(出典) 橋本景岳(左内) / 伴五十嗣郎全訳注『啓発録——付 書簡・意見書・漢詩』(講談社学術文庫・1982年) 40-43頁。

(注) 原文縦書き。問題作成の必要上、段落番号を付し、下線を加えた。